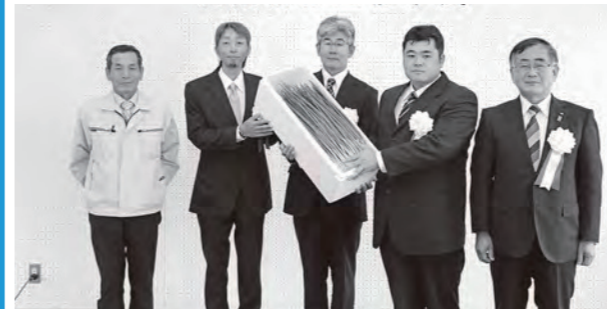


国東市こねぎトレーニングファームの春の動き

修了式 3月29日 入講式 4月13日

国見町伊美のみんなかんで、第3期生の修了式が行われました。今回、修了するのは、佐藤翔平さん（大分市出身）と宗安浩行さん（国東市出身）、森夏樹さん（鹿児島県出身）の3名です。研修修了後は、国東町の来浦地区と小原地区で自立してこねぎ栽培に取り組んでいきます。佐藤さんは、「研修で学んできたことを活かして、よいこねぎを生産していきたい」、宗安さんは、「4月からは自力で、安定した収量と品質のものを生産できるようにしていきたい」、森さんは、「今後入ってくる受講生をサポートできる側になれるように、しっかり頑張っていきたい」と抱負を語っていました。

国見町伊美のみんなかんで、第4期生が入講式が行われました。今回、入講するのは、上地智徳さん（大阪府出身）と遠藤和行さん（北海道出身）、萱島弘充さん（国東市出身）、森林太郎さん（愛知県出身）、名城裕子さん（兵庫県出身）の5名で、過去最多の入講生となりました。これからの研修を記録する研修記録簿が、5人に授与されました。大分味一ねぎ生産者を代表して、長廣正光さんが、「こねぎ栽培にも頑張ってもらいたいが、自立後は地域の中に溶け込んで、立派なリーダーに成長することも期待しています」と激励をしました。



左から2人目が森さん、宗安さん、佐藤さん



左から上池さん、遠藤さん、萱島さん、森さん、名城さん

図書館だより

どくしよがいちばん!

問合せ先

- 国見図書館 ☎0978-82-1585
- くにさき図書館 ☎0978-72-3500
- 武蔵図書館 ☎0978-69-0946
- 安岐図書館 ☎0978-67-3551

「購読雑誌を一部変更しています」

廃刊などにより図書館においてある購読雑誌を一部変更しています。お気に入りの雑誌が最寄りの図書館から無くなっている場合があるかもしれませんが、市内の図書館にありましたらお取り寄せいたしますのでご了承ください。詳しくは館内掲示しています『2017年度国東市図書館購読雑誌一覧』をご覧ください。またご不明な点などありましたら、カウンターまたは図書館職員へお問い合わせください。



いろいろなジャンルの雑誌を置いています。(安岐図書館)

「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」1~7

廣嶋 玲子/作 jyajya/絵



困ったとき、現実にはないわかってはいるけれど「こんな魔法が使えら…」なんて空想をしてしまったことはないですか？ そんな道具が美味しいお菓子だったらちょっと得した気分を味わえるかも、なんて思いませんか？ この本に出てくる駄菓子屋「銭天堂」は、選ばれたお客さんにおいしい駄菓子でちょっとした希望を叶えてくれますが、幸せになるのも不幸になるのも使い次第。毎回おいしそうな駄菓子が繰り広げるちょっと不思議なお話です。

図書館に寄つちよぐれ

Q. もう大きいのにたまごのからの中ですごしているおにいちゃんのおはなしを書いているのは誰でしょう。 答えは図書館で!

市長室から

市長日記

『去る月と出会う月』

国東市長 三河 明史

No.72

故人 西のかた 黄鶴楼を辞し
烟花 三月 揚州に下る
孤帆の遠影 碧空に尽き
唯だ見る 長江の天際に流るるを

学校で教わった中国の詩人、李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」ですが、古代の中国でも三月は別れの月だったのでしょうか。この時代の別れは、現代と違っておそらく永遠の別れだったのでしょう。もう二度と会えないだろうとの覚悟の別れなのでしょう。

今日、小学校の卒業式が市内で一斉に行われ、無事終わりました。これで三月初めに行われた高校の卒業式、それに続いて行われた中学校の卒業式、全てが終わりました。

高校と中学校の卒業式では、答辞を読んでいた女子生徒が感極まって泣き出し、他の卒業生も涙にくれていました。ドライと言われる現代っ子でも卒業式では泣くのですね。

国東市でも三月二十一日に退職者も含めて人事異動の内示を出しました。そして三十一日には退

職者への辞令交付が行われます。やはり三月は別れの月なのです。私もそうだったけれども、人生には小さい別れがあり、大きい別れがあります。三月三十一日は、色々な意味で人生の区切りをつける日なのです。

そして対照的に四月は、出会う月なのです。入学式があり、入社式があり、多くの出会いが生まれます。その席で泣いているのを見たことはありません。隣り合わせの月なのに、別れを泣く月と出会いを喜ぶ月。面白いものです。西洋でも同じように感じるのでしょうか。

二年前のNHKの朝ドラ「マッサン」で、出征する青年「一馬」に「蛍の光」を唄う場面がありました。「蛍の光」は、スコットランドの民謡ですが、日本では卒業式や別れの場で歌う「別れの歌」です。ところがスコットランド人の「マッサンの妻エリー」は「この歌はスコットランドでは別れの歌ではなく、恋人達が再会を祝う歌だ」といって、工場を締め切り、皆で「蛍の光」を原語で歌う場面がありました。「一馬」に「必ず生きて帰って来い」という気持ちを込めて歌ったのです。良い場面でした。

「別れ」は「出会い」の始まりでもあるのです。「望みがあれば、別れも楽し」です。

国東町小原地区のみなさんが黒津崎の古墳公園で花植え

国東町の小原地区（小原区・上小原区・黒津区）を良くする会（会長 財前達郎氏）のみなさんが、3月18日、黒津崎の古墳公園周辺に花苗を植えました。黒津崎は、昭和40年代に国民休養地の指定を受け、自然と触れ合う野外レクリエーションの場として整備されました。それから40年以上経過し、

黒津崎を蘇らせるために小原地区を良くする会が起ち上がりました。今回、古墳公園周辺に彼岸花3万株と水仙やフジバカマの苗を会員一人ひとりの手で植えました。今後も黒津崎再生に向けた活動を続けていくそうです。

